

# 無償住居で再建準備

## ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第4部 支援の現場から  
(10)

⑩

### 住宅支援(上)

うに話した。

与那原町東区の新興住宅地。「風マサースクエアゆいはあと」事務所裏のアパートの一室で開かれる学習支援の「塾」で、子どもたちが熱心に机に向かっていた。

小学6年の男の子は、学校が終わった後、ほとんど毎日「ここ」に来るといって、宿題をしたり、得意な算数の予習をしたり、他の子と遊んだり、おやつを食べたりして、母親が仕事から帰ってくるまでの時間を過ごす。

「ゆいはあとに通う前は家でゲームして、テレビ見て、それから勉強だった。今は塾で勉強から、余った時間にテレビを見るようになった。今の生活の方がいいかな」と少し照れくさそうに話した。

## 家計管理子の学習にも助言



「ゆいはあと」の学習支援。アルバイトの大学生、大学院生らが子どもたちの勉強をサポートしている。=与那原町東区

「ゆいはあと」は、県が2012年度にスタートしたひとり親世帯を支援する事業の拠点。県母子家庭福祉連合会が事業を委託し、さまざまな課題を抱え、経済的に困難しているひとり親家庭に民間アパートを借り上げ、住居を無償で提供している。

住居提供に終わらず、親の子育てや就労支援、子どもの学習支援などを総合的に行う。一括交付金を利用したモデル事業で、企画初の試みだ。

「ゆいはあと」には、生活支援・学習支援コーディネーターや人のスタッフが常駐し、想をそれぞれサポートに当たる。支援期間は1年、協議で最長2年まで。利用者は家賃の負担がなく、

「ほとんどの方が債務を持っていて、子どもの通学、車検などでもまとまったお金が必要になって借金し、子どもの病気で仕事を休み収入が減って、返せなくなる。資金が安くて、ギリギリ

のところで生活しているもので、つねふと立ちゆかなくなるケースが多い」。生活支援コーディネーターの新垣サユリさん(仮)はそう話す。

利用者は事務所の近くに住み、コーディネーターと密に面談しながら生活を直直し、ライフプランを立て、実践していく。支援の柱の一つが家計管理だ。債務整理しながら家計簿の整備を行う。「コマちゃん」とも呼ばれる。コマちゃんもいるけれど、家計簿をつけることで

お金の流れが把握できた」と新垣さん。家賃分を貯蓄し、支援後に備えるようアドバイスする。

一方、「ゆいはあと」では、収入を増やすための資格や技能の取得に力を入れる。県母連と連携し、パソコンや調理事務、介護などの講習会を無料付きで受けられるようにしている。

子ども支援の柱が学習支援だ。小学生向けに週3回、「塾」を開講。専任の学習支援コーディネーターのほか、現役の大学生・大学院生が指導に当たる。

学習支援コーディネーターの平島聖恵さんは「学習支援費を貸し付けることで子どもたちの将来の選択を広げたい。大人が思う以上に気を使う子どもたちが、何でも話せる場所、安心して来られる場所にしたい」と話した。

(子どもの貧困)取材班・高橋順子